

園番号 702

令和4年度 奈良市立都祁こども園 研究実践概要

園長名 鍋谷 理佐子
全園児数 93名

1. 研究主題 「心豊かで 生き生きとたくましく活動する子どもの育成をめざして」
～一人一人が自分らしさを発揮しながら

互いに響き合える環境を探る～

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

0歳児から5歳児までの様々な園児が、遊びや生活の中で〈もの〉〈ひと〉〈こと〉と関わり、様々な経験や体験を通じて学び、成長している。国籍や性別、言語や生活習慣の違い、また、集団参加や人との関わりで様々な困り感を抱えているなど、多様な子どもが共に生活を送っている。発達の特性や個人差など一人一人の子ども理解を深めると共に、子ども達が「ふしぎだな」「どうなっているのかな」「おもしろいな」と自らわくわくと心を動かす姿を見つめ、一人一人が自分らしさを発揮しながら互いに響き合える環境を探りたいと思い、研究主題に設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・多様な子ども一人一人が、自分らしさを発揮しながら夢中になって〈もの〉〈ひと〉〈こと〉に関わって遊ぶ姿に着目し、互いに響き合える環境を探る。

②研究の重点

- ・乳幼児の発達に応じた保育内容を工夫し、多様な子ども達が自分らしさを発揮し、心を動かして〈もの〉〈ひと〉〈こと〉と関わり、どのような環境で互いに響き合い、変化していくのかについて考える。

③活動の方法

自分らしさを発揮している姿 互いに響き合っている姿
環境によって変化した姿

【0歳児】 6月 A児(1歳1か月)B児(1歳0か月)の姿から

お部屋の扇風機をつけると、「ブーン」という音にA児が気づき天井を見上げ、指さして保育者を見ていた。A児の指さしに保育者が気づき、A児の指さすものを同じように指さしながら、「扇風機だよ」と言葉をかけた。A児はもう一度、扇風機を指さし、不思議そうに見ているので、A児と一緒に見上げながら「扇風機」「回ってるね」と言葉をかけた。そして、もう一台扇風機があることにA児は気づき、また指さして保育者を見るので、「こっちも扇風機」「扇風機くるくる～」と表情を見ながら言葉をかけた。このやり取りに気づいたB児も天井を見上げ、A児と保育者が指さす方を見て同じように指さした。「扇風機だよ」「くるくる～」とB児にも伝え、一緒に見上げながら指をさし、保育者を見たり、扇風機を見たりしていた。「扇風機くるくる～」と指さしながら伝え、B児も指さしながら、口をすぼめて「くる～」と声を発した。



<評価>

- ・扇風機が回っているという、大人ならあたりまえの日常が0歳児にとっては新しい経験である。日常の一コマの中の不思議さを、“指さし”を通じて保育者に知らせ、その思いを保育者が丁寧に読み取り、応えることで、「もの」と言葉が会うきっかけをつくることができた。0歳児にとって身の回りのすべてが新しく出会う環境であり、保育者という人的環境のかかわり方の大切さを感じた。これからも安心、信頼できる環境のもとで、自分の思いを自分なりに表現し、身近な人と気持ちを通じ合う経験を大切にしていきたい。

【1歳児】 12月「いっしょだね」 A児（1歳 10ヵ月）B児（1歳 10ヵ月）の姿から

お部屋にできたままごとコーナーでA児がバンダナを取り出し、「これ！」と言って保育者に差し出した。保育者が「Aちゃんの頭につけるの？」とA児の思いを受け止めて巻くと、カゴから皿へと食べ物を移し始めた。その様子を保育者の隣で見ていたB児が、バンダナをサッと取りに行き、「して」と保育者に差し出した。「Aちゃんと一緒にだね」とB児の頭に巻くと、同じように皿に盛り付け、リンゴを1つA児に「ハイ」と渡した。A児はそれを受け取りじっとB児を見て「ハハハ」と笑うと、皿を持って部屋の中を歩き始めた。保育者が、「Aちゃん、お散歩に行ったのかなあ」と話すと、B児も皿を持って立ち上がり、A児の後を追って歩き始めた。そして、絵本コーナーの長椅子に2人一緒に座り、食べる真似をして笑い合った。



<評価>

- ・日々の生活の中で一人一人の甘えや欲求が満たされ、保育者との安心できる環境があることで、周りにいる子どもの行動や「もの」に関心を示し、自分から真似たり、同じことをして喜んだりする姿が見られるようになることを実感する。また、一人一人がどのような「こと」「もの」に興味を持って遊んでいるのかを保育者が把握し、その時期に合った環境を整えたり、タイミングを見て友達との関わりをつなげたりすることの大切さを感じている。これからも、安心できる環境のもとで自分の思いを十分に出し、周りとの響き合いを楽しんで欲しい。

【2歳児】 10月「いらっしゃいませ」 A児（2歳 8か月） B児（3歳 6か月）の姿から

A児はままごとで遊ぶことが好きで、秋頃からは、棚の上につくったごちそうを並べて「いらっしゃいませ」とお店屋さんの真似をするようになった。その姿から遊びが広がるように、保育者が牛乳パックでカウンターをつくり、棚の上に設置した。A児はさっそくカウンターの上にフェルトやチェーンリングなどでつくったごちそうを並べ、「いらっしゃいませ」と元気な声で周りに知らせた。保育者が「Aちゃん、おいしそうだね。これください」と声を掛けると、嬉しそうな表情で「はい、どうぞ」とごちそうを渡した。その様子を見ていたB児が「Bもやりたい」とA児の横に並んだ。B児の思いを受け止め、「Bくんもお店屋さんになったんだね。Aちゃんと一緒にだね。」と声を掛けると、A、B児は顔を見合わせ微笑んだ。しばらくお店屋さんを楽しむと、B児「次はお客さんする」と言い、カウンターを挟んでA児と向かい合い、「Aちゃん、これ下さい」と言った。A児「はい、どうぞ」B児「ありがとう」とごちそうを受け渡した。保育者「Aちゃん、おいしそうなおはんできたね」「Bくん、Aちゃんにももらったごはんおいしいね」と共感すると、A、B児は満足した表情を見せた。



<評価>

- ・子どもの姿や言葉からそれに合った環境を整え、遊びやイメージに寄り添い、仲立ちとなりながら友達との関わりへと繋げていくことで満足感や嬉しさ、楽しさに繋がることを実感した。子ども達は、保育者との安心できる環境の中で過ごすことで情緒が安定し、自分の思いを表出することができるようになる。自分では思いを十分に伝えられないこともあるため、保育者が思いに寄り添い、受け止めたり、仲立ちとなったりすることが大切であると感じている。これからも、子ども達が安心できる環境の中で、一人一人の思いを丁寧に受け止め、寄り添いなが

ら周りの「ひと」「もの」への橋渡しとなり、互いに響き合う子ども達を支えていきたいと思う。

【3歳児】 10月 「みんなの道やな」

戸外で身近な自然物を集めたり、用具や遊具を遊びに取り入れたりしながら自分のしたい遊びを楽しんでいた。A、B児は保育者と一緒に砂山をつくり、高くなったところにA児がトイを立て掛けて車を走らせようとした。すると、「崩れちゃうからやめて」とB児が自分の思いを伝えた。保育者がそれぞれの思いを共有すると、「じゃあこっちにする」とA児は砂場の囲いにトイを立て掛けて車を走らせ始めた。何度も走らせるが傾斜が緩やかなためスピードが出ず、A児「シューって速くしたいな」とつぶやいた。A児がいろいろな場所にトイを立て掛けて走らせているうちに背の高い用具入れを見つけ、勢いよく下まで走っていく様子を見て「ここにしよう」「シューっていったよ、速い速い！」と保育者と一緒に喜んだ。高さや速さの違いやそのおもしろさを感じられるように、保育者がさまざまな台を用意しておいた。近くにいたC、D、E児が「Aくんすごいな」「みんなの道つくりたい」とA児の遊びに興味をもち、車や電車、石、ドングリなどを持ってきて転がしたり、台を使って道をつくったりし始めた。「みんなの道やな」と嬉しそうにA児が話し、転がし遊びが広がった。



<評価>

- これまでの経験から、砂山の上にトイを立て掛けて車を走らせたいと考えたA児であったが思うようにいかず、別の場所で何度も試す姿が見られた。「シューって速くしたい」というA児の思いを保育者が大切に受け止め、イメージの実現に向けて一緒に取り組んだことで、3歳児なりに考えたり試したりする姿に繋がり、達成感や満足感を味わうことができた。また、「みんなの道」という同じ場で同じイメージをもちながら友達のしていることに興味をもち、「やってみよう」「一緒にしたい」という気持ちが出てきて、友達との関わりが広がっていくきっかけにも繋がった。

【4歳児】 9月 「でんぐりがえりできたー」

運動遊びに取り組む中で、パラバルーンを使ったいろいろな動きに挑戦し楽しんでいた。その動きの中で、前転をしてバルーンに隠れるという動きを取り入れることになり、マットの上でみんなで練習した。A児も友達と一緒に何度も挑戦するが、おでこを床で打ってしまい、前転の動きになると怖くて固まってしまうようになった。できるようになった子が増えてきた中で、保育者が「もう一度みんなで前転の見せ合いっこをしよう」と伝え、保育室にマットを用意した。A児の順番になるが、なかなかやろうとしないので、保育者が「どんなところに気をつけてやったらいいかな？」と全体に声を掛ける。B児が「こうやってお尻あげるねん」とやって見せる。B児に続きC児が「頭の上ついて後ろ見るねん」と教えてくれた。それを聞いて保育者が「Aちゃんもう一回やってみる？」と声を掛けると、A児も自分なりにやってみようとする姿が見られた。その後も何度も練習する姿が増え、保育者の補助なしで自分の力で回ることができたA児。「でんぐりがえりできたよ。バルーンに隠れられたよ」と、保育者や友達に嬉しそうに伝える姿があった。A児の頑張りや諦めない気持ちをクラスの中で共有し合い、A児の姿に気付いて教えてくれたB児C児の気持ちを大いに認めていくようにした。



<評価>

- 運動遊びの中で、友達と一緒に初めてのことに挑戦できる環境をつくり、諦めずに取り組んでほしいという思いで進めた。おでこを打ったことから怖くなり、なかなか取り組めなかったA児の気持ちを受け止めながらも、もう一度挑戦し成功体験を味わってほしいと考え、他児から刺激をもらえるような環境を整えた。友達の姿に目を向け、うまくできる方法を教え合うことで、A児自身も、友達と一緒に成功したいという思いで諦めず頑張る姿につながった。クラスみんなで取り組んだ経験や、苦手意識を乗り越えたA児の気持ちを大切にしながら、いろいろな

活動を自信につなげていきたい。

【5歳児】 6月 「お花の氷をつくってみたい！」

4月から園庭の身近な自然物を集め、色水遊びをしたり、ごちそうづくりをしたりすることを楽しんでいました。気温が上昇してきて水に触れて遊ぶことが心地良い季節になり、色水づくりからジュースづくりを楽しむ姿に発展していました。

A児「かわいいお花(アカツメクサやニチニチソウ、ペチュニアなど)見つけてきたから今日もジュースつくろう」B児「うん！つくろう！」とワクワクしながらジュースづくりを楽しんでいた。集めてきた草花の中から自分で使いたい草花と適量の水をすり鉢に入れ、すりこ木ですりつぶすと、A児「きれいなジュースができたね」B児「本当だ。私もイチゴのジュースができたよ」と嬉しさを共有していた。



更にアイデアを考え、C児は「ここに水入れてとってきたお花入れてみよう」と製氷皿に水を入れ、花びらをちぎって飾っている。その様子を見たA児「かわいい」B児「お花の氷？」C児「そう。本当に凍ったらいいのにな。そしたらジュースに入れられるのに」とアイデアを周りの友達に共有していた。

子ども達の思いを受け止め、相談し、「本当に凍らせてみよう」と取り組んでみることになる。とA児、B児も一緒にお花の氷づくりを楽しんでいた。

片付け後、A児B児C児と一緒に冷凍庫に製氷皿を運び、保育者が冷凍庫に入れた。C児「かわいいお花の氷ができますように！」とお願いした。A児B児も「楽しみだね」「明日にはできるかな」と期待していた。

次の日の登園後A児B児C児と一緒に冷凍庫を見に行ったら、保育者が冷凍庫から製氷皿を出し、子ども達に手渡すとC児「わぁーきれい」A児「大成功だね」C児「これでジュースつくろう」と大喜びでその日もジュースづくりを楽しんだ。

<評価>

- ・4月から遊んできた色水遊びをジュースづくりに発展させ、自分達で集めてきた草花を氷に入れたいという子ども達の思いを実現させたいと取り組んだ。アイデアを言葉で周りの友達に伝えることで周りの友達もC児のアイデアを受け止め、一緒に氷づくりを楽しんでいる姿が見られた。本当に凍らせてみることで、遊びの中で考えたり試したり工夫したりする楽しさやおもしろさを感じられるようにしたいと考えた。実際にお花の氷ができると子ども達もとても喜び、その後のジュースづくりもより楽しいものとなったと思われる。今後も遊びの中で子ども達の発想を大切に、思いに耳を傾けて、遊びが発展させられるように一緒に考えていきたい。

5. 研究の成果

- 多様な子ども一人一人と保育者が信頼関係を築くことで、安定した生活や遊びを積み重ねることができる。それぞれの年齢や発達に応じてわくわくドキドキする瞬間は様々である。子どもが興味のあるものに出会える環境やわくわくドキドキ心を動かす環境を保育者が整えることで〈もの〉〈ひと〉〈こと〉に主体的に関わって自ら考えたり、繰り返し試したり「もっとやってみよう」と言う姿につながった。

6. 今後の課題

- 今後も、子ども一人一人の理解を深め、各年齢で発達段階に応じた保育内容の充実を図り、保育者間で共有することを大切にしながら、一人一人が自分らしさを発揮し、互いに響き合える環境構成や援助を工夫できるように探っていきたい。